

第3期(2024年4月1日～2025年3月31日)事業計画

下記の現状認識において、弊団体はコロナ禍終了後急速に不可視化されている「不安定居住 & 不安定就労状態におかれた主に26歳～39歳の後期若年層・40歳～54歳の氷河期世代」を中心に、都市の中で「タテ&ヨコへの不安定な移動」をおこなう方へ、緊急的な支援アプローチと通信インフラ提供を中心とした「命綱/テザー」の社会実装を進める。

【現状認識・現在の「困窮者」の類型化から考える方向性（前年に引き続き）】

- 類型1**：「住まいあり&年金や生保を既に使っているが、物価高で苦しい」層
 - ・住まいがあり、すでに生活保護や年金を受給しつつ、それが足りなくて苦しい。
 - ・大型の屋外炊き出しに並ぶ方のボリュームゾーン（一説には7割がそうだともいう）

- 類型2**：難民&仮放免&日本に住む外国籍の方
 - ・2023年度も大変な増加を見せた。
 - ・2000年頃の日本人ホームレス状態の方の支援のリバイバルであり、制度の獲得&ハウジングファーストの 이슈という考えも変わらない。
 - ・一般的な支援ラインに必ずご相談が来る状況で、緊急支援ラインも例外ではない。居住&言語対応ふくめ団体間連携を強めておくことと、自団体として提供出来るメニューを開発する必要性あり（トイミッケだと通信インフラ提供となる）

- 類型3**：「不安定な仕事をしつつ不安定な居所の中で、不安定に安定している」層
 - ・1年間「せかいビバーク」をまわして、改めてこの部分の層の厚さ&既存の相談窓口へのアクセスしにくさが浮き彫りになった。いってみれば「せかいビバーク」で彼らにつながる事が出来る事が解った。
 - ・26歳～39歳の後期若年層&40歳～54歳の氷河期世代が中心。一定の収入があったり、仕事を失っていてもすぐに仕事を見つけ、その間だけ支援が必要であったりと生活保護を含め既存の福祉制度ではニーズにあっていない。
 - ・16～25歳の若年層にもリーチしていて、「実家（ないし居所としていた施設など）&地方からの飛び出し」（上京）パターン
 - ・「貧困ビジネス」や「狭小シェアハウス」の隆盛は、この層が支えている。既存の支援団体は彼らに負けている。「即日安い部屋に入りたい」「最低限の生活空間があればよい」「携帯がほしい」といった彼らのニーズに、既存の団体は対応出来ていない。

※トイミッケは「類型3」にフォーカスするが、さらに解像度を上げると彼らが「移動」しており、その「移動」を補足しつつ、邪魔をせずに手を伸ばす仕組みが必要であり、対応していく。

●移動A：ヨコの移動（地域を跨ぐ移動）

- ・地元縁がない&家族がない&仕事もどこにいてもかわらない&ネットでつながればよい、という「その場所にいる」意味が人生の中で極めて薄く、地域移動に躊躇しない。
- ・高速バスの相対的な価格低下。
- ・若年層を中心とした地方への落胆と、東京に来れば仕事があるという希望。
- ・「せかいビバーク」でも毎月こうした「移動」した方にお会いし、必要に応じて帰宅支援もおこなっている。

●移動B：タテの移動（制度・階層化された社会資源間の移動）

- ・生活保護を中心とした公的支援について、ネット上のインフルエンサー等の紹介によって知る方&つながる方が増加したが、一方で「ライフハック」的に使う方が増加した。
- ・その他、支援団体や支援スキームの情報もかなり広まり、こうした情報についての利用者側の受容が「福祉支援」ではなく「お得情報」として認識されるといった状況も現出している。
- ・「スポットワーク等の仕事」→「複数の支援団体での支援」→「複数地域での生活保護の利用」→「グレーな仕事」→「逮捕と収監」→「出所後生活保護」→「施設を出てスポットワーク等の仕事」など、短いスパンで目まぐるしく寄るべき社会資源を移動していく。
- ・全てが「ライフハック」的に相対化されてしまっている。

※こうした移動は以前からあったわけだが「①通信インフラ（スマホ）を生活基盤として依存（通信のほうが居所よりも優先順位が高い）」「②移動コストの相対的な低下」「③自らを助ける情報（公的支援も含む）の一般化・ライフハック化」の部分が質的に違い、またそれが量的な差異を生んでいると考える。

上記認識を前提に、本年度は下記事業に注力する。

（1）支援につながりにくい方に向けたアウトリーチ事業

▶市民×ICTの緊急支援網「せかいビバーク」

- ・緊急スポットの拡大。
- ・東京23区で未設置の場所および設置済でも少数に留まる地域を埋める。
- ・埼玉&千葉&神奈川への設置を進める
- ・土日や夜ニーズへの注力
- ・より手厚い支援体制作り
- ・前年度まで実施していた「夜のセーブポイント」および「フードデリバリーの方への自転車提供」については、前者は事実上せかいビバークのニーズと一体化していること、後者はスポットワークアプリの隆盛から住まいのない方が選ぶ仕事としてフードデリバリーが低下していることなどを鑑み、「せかいビバーク」事業に統合。

▶動画によるアウトリーチ

- ・いわゆる「生活保護おじさん」アカウントにて実施してものの再開。
- ・実支援の急速な増加により作業が出来ず、停止状態となっていた。
- ・ただ、現状「貧困ビジネス」系事業者やグレーな業種と、不安定居住&不安定就労層は「取り合い」になっており、ウェブ広告等で認知を巡っての撃ち合いがある。それに勝てないとまず目にとまることすら難しい。

（2）生活困窮者のための通信インフラ支援事業

▶電話相談を統合する「ボイチャ相談」

- ・「A：ブラウザから誰でも相談出来る無料相談公衆電話（ボイチャ相談）」と「B：さまざまな電話相談会・相談電話を統合し、システムの提供によって運営側の負担も減らしつつ巻き込む（ボイチャ相談：受架電システム）」のふたつを展開。
- ・ポータルサイトの実装と公開。

▶テカラテWi-Fi（市民による公衆Wi-Fi）

- ・相談会での展開は継続。
- ・システム自体を刷新する必要がある。（助成金獲得など）

▶つながる電話アプリ版

- ・他法人でおこなっていた、住まいを失った方への電話番号提供をアプリとして提供。
- ・これもシステムというよりファンドレイジングと運用&広報の目処を本年度中につける。
- ・「移動」する相談者への「命綱/テザー」を実現できるものとして実現する。